

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：34302

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13159

研究課題名(和文) ブラジル日系社会知識人層の知的実践および言論活動の研究

研究課題名(英文) The Immigrant Intellectual in Brazil's Nikkei Community - Intellectual Practice and Speech

研究代表者

ソアレスモッタ フェリッペアウグスト (Soares Motta, Felipe Augusto)

京都外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：30867198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：日系ブラジル社会において産出された資料をベースに、「移民知識人」(知の生産および頒布に携わる教養人)に光を当て、「移民」たる存在に対する様々な言説を解明した。取り分け、ブラジルにおいて戦争および敗戦を経験し、その体験を綴った岸本昂一の『南米の戦野に孤立して』の歴史的な意味および重要性を論じた。また、大日本帝国を訪れ、ポルトガル語で体験記を刊行した若きブラジル人のインテリ、マリオ・ボテリョ・デ・ミランダを論じた。大日本帝国の「非勢力圏」に位置付けられ得る日系ブラジル社会と国内外との関係、ラテンアメリカの地政学的重要性を移民知識人の思想および言論活動を通じて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本・ブラジル関係を強めるために日系ブラジル社会の歴史を理解することは必要不可欠である。このプロジェクトは、今までほとんど注目されて来なかった「移民知識人」に光を当てている。そうすることにより、移民がその行為主体性(agency)を発揮し、自己の歴史の叙述に積極的に携わっている有様が見えてくる。また、大日本帝国のみならず、その「非勢力圏」であるブラジルにおいて日本語、「日本文化」、そして日本民族が如何に語られたかを究明しようとしたところは、日系ブラジル移民の研究に貢献していると共に、大日本帝国とラテンアメリカの関係史の理解にも寄与していると確信している。

研究成果の概要(英文)：Based on materials produced in the Japanese-Brazilian society, this project sheds light on what I call "Immigrant Intellectuals" (cultivated Japanese immigrants involved in the production and distribution of knowledge) and elucidates various discourses about the life of Japanese immigrants to Brazil. In particular, I discuss Koichi Kishimoto's "Isolated in the South American Battlefield", who himself experienced the war and defeat in Brazil, and discuss the historical significance and importance of his work. I also discuss the young Brazilian intellectual Mário Botelho de Miranda, who visited the Empire of Japan and published his experiences in Portuguese. Through the thought and discourse activities of immigrant intellectuals, I examine the relationship between the Japanese-Brazilian society, which could be positioned in the "non-influence zone" of the Empire of Japan, Japan and the rest of the world, as well as the geopolitical importance of Latin America.

研究分野：史学

キーワード：日系ブラジル社会 移民知識人 戦争経験 岸本昂一 マリオ・ボテリョ・デ・ミランダ 集団記憶 歴史叙述 エスニック・メディア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始に当たり、日系ブラジル移民が生産する文化が徐々に注目されつつあった一方、移民知識人の存在はほとんど取り上げられていなかった。特に移民知識人という階層を体系的、および質的に分析する研究が少なく、先行研究の蓄積が少なかった。なお、移民による文化的活動を論じる際、知識人の存在は極めて重要であるのに、従来の移民研究はその活躍を視野に入れてこなかったことが本研究を始める主たる動機であった。

移民知識人の存在がなぜ重要なのか。それは、文化的活動(文学・評論・歴史など)は、多くの場合、知識人により、もしくは知識人層を中心に展開されるからであり、知識人が集団記憶の構築や歴史の叙述に積極的に参加しているからである。いわば、知識人は善かれ悪しかれ日系ブラジル社会の代弁者になり、知識人によりディスコースは後ほどの学術的研究の素材になり得るからこそ、その言説が如何に生まれるかを見つめることが肝要であろう。報告者にとって、移民知識人を取り上げることにより、日系ブラジル社会の歴史に対する理解を深めることが可能であるという確信がこのプロジェクトの根底にあった。

2. 研究の目的

本研究では、1920年代から1980年代までに活躍した移民知識人を捉え、主要な思想的系統および課題を特定し、内容的な分析を試みた。そのため、世界的パンデミックと臨機応変に対応し、可能な限り日本国内およびブラジルにおいて調査を行い、移民知識人がどのような問題を、どの媒体において、どのような思想系統の下で論じたかを解明することが目標であった。

本研究の最初の目論見は移民知識人の存在を「体系的」捉えることだった。具体的に、誰が(人物の特定)、どこで(媒体)、何を(思想的な課題)を発信したかを把握し、分析することであった。筆者が大学院に在籍していた時に分析対象とした知識人グループの機関誌『文化』(戦前発行)および『時代』(戦後発行)から出発し、日系ブラジル社会の有力な知識人グループであった「土曜会」系列に属する知識人(アンドウ・ゼンパチ、半田知雄、河合武夫など)、またそのグループに直屬しない物(鈴木貞次郎、清谷益次、武本由夫など)に対する考察を通じてそれを浮き彫りにしようとした。そのため、文献調査の他に、ブラジルで行われる資料調査、および聞き取り調査を予定していたが、コロナ禍のため臨機応変に対応し、遠隔からでも入手できる資料の分析に力を注いだ。本研究の二つ目の目標は従来の研究でされる「戦前」と「戦後」という二項対立な区分を批判的に捉え、移民知識人による内的統合および断裂の有無、または日本/ブラジルの思想界との接点を追究することであった。最後に、先行研究から既に指摘されていた思想的課題(民族・移住・同化・言語・子弟教育)から出発し、知識人が取り上げたテーマを特定し、それに対する考察を行うことであった。

3. 研究の方法

本研究はテキスト分析を主たる方法として採用した。日系ブラジル社会で活躍した移民知識人、あるいは帝国の内外において日系ブラジル社会を考えた日本人・ブラジル人が産出した資料に光を当て、その思想の分析を試みた。そのため、日系社会内で営まれていたエスニック・メディア(日本語新聞、文学雑誌、機関紙など)が重要な資料として据えられた。また、日系社会内外で刊行された書籍(移民による回顧録および自伝、歴史書、訪日見聞記など)に対する考察も行った。最後に日系ブラジル社会をめぐる視覚表象(写真や絵画)も論じた。

本研究はディシプリンベースにおいて歴史学の手法を踏襲しているが、単一の方法論が定まっていない「移民研究」(マイグレーション・スタディーズ)の研究成果を多いに参照した。取り分け、近年において社会学、文化人類学、文学の分野から提起されてきた議論に耳を傾け、それと対話する形式において進められたことを申し添える。

4. 研究成果

この研究課題の成果としてシンポジウム・学会での発表を8回、論文2本の成果を上げた。以下にその概要を記す。

日系ブラジル社会における知識人の役割の重要性について「ブラジル日系社会における歴史、記憶、そして移民知識人」という題をもって「日本・ブラジル研究ゼミナール」(サンパウロ大学日本語学科およびサンパウロ人文科学研究所共催イベント、2020年12月28日)において発表した。また、2020年度国際新世代ワークショップ(「国際日本研究」コンソーシアム・法政大学国際日本学研究所・アルザス欧州日本学研究 共催事業所 2020年11月8日)において、「抑

圧を歴史化すること：日系移民知識人と 1930～1945 年国家主義ブラジルの記憶」という題で移民知識人と移民史の叙述について発表した。移民知識人の活躍とブラジルにおける日本学の誕生を結び付けて「Japanese Studies in Brazil: History, Present, and Prospects」(Osaka University Anthology of Transborder Cultural Studies、4号、17～32頁)という論考を英語で刊行した。

移民知識人と「戦争」をめぐる言説について数回にわたって発表した。例えば、「Visions of War: Nationalism, Pride, and Rancor in Japanese and Brazilian Testimonials」(Global Japanese Studies Research Workshop、2021年5月24日)、「異境から戦争経験を語る M. B. デ・ミランダと岸本昂一におけるナショナリズム・国家・他者」(第42回日本ラテンアメリカ学会定期大会、2021年6月6日)そして「日の丸の下で働きたい：戦前・終戦直後のブラジル日系社会の言論界における「大東亜共栄圏再移住論」の言説と南米永住論を中心に」(東アジア日本研究者協議会第5回国際学術大会、2021年11月27日)が挙げられる。これらの一連の発表は報告者が2022年に発表した「異境での戦時体験を記録して -マリオ・ボテーリオ・デ・ミランダと岸本昂一を事例に-」(『海外移住資料館 研究紀要』16 国際協力機構横浜センター 海外移住資料館、153～170頁)に結実した。当論考は第二回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」懸賞論文部門の最優秀賞を受賞し、高い評価を受けた。この論考の受賞者講演において、報告者はさらに大日本帝国研究とラテンアメリカ研究を繋げる好材料として1940年に実施された「サンパウロ大学生訪日団」をめぐる事例を紹介した(「1940年、はじめて見る日本 ある日系二世と一人の非日系ブラジル人の来日記」、第二回 JICA 海外移住論文の受賞者講演会、2022年7月30日)。最後だが、本研究から残された課題をさらに追及すべく、報告者は新しい研究課題「日系ブラジル社会と大日本帝国の思想的紐帯の研究」(日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究 2023年4月 - 2027年3月)に応募し、採択された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Soares Motta, Felipe Augusto	4. 巻 16
2. 論文標題 異境での戦時体験を記録して マリオ・ポテーリョ・デ・ミランダと岸本昂一を事例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 海外移住資料館 研究紀要	6. 最初と最後の頁 153-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト	4. 巻 4
2. 論文標題 Japanese Studies in Brazil: History, Present, and Prospects	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『越境文化研究イニシアティブ論集』	6. 最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Soares Motta, Felipe Augusto
2. 発表標題 日の丸の下で働きたい : 戦前・終戦直後のブラジル日系社会の言論界における「大東亜共栄圏再移住論」の言説と南米永住論を中心に
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会第5回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Soares Motta, Felipe Augusto
2. 発表標題 日系移民の戦争経験を勝負抗争の「脱コロニア史観」から考える
3. 学会等名 日本移民学会第 30 / 31回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Soares Motta, Felipe Augusto
2. 発表標題 異境から戦争経験を語る M.B. デ・ミランダと岸本昂一におけるナショナリズム・国家・他者
3. 学会等名 第42回日本ラテンアメリカ学会定期大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Soares Motta, Felipe Augusto
2. 発表標題 戦争を見つめて：日本とブラジルからの供述におけるナショナリズム・プライド・恨み
3. 学会等名 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点 グローバルジャパンスタディーズリサーチワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト
2. 発表標題 ブラジル日系社会における歴史、記憶、そして移民知識人
3. 学会等名 日本・ブラジル研究ゼミナール（サンパウロ大学日本語学科およびサンパウロ人文科学研究所共催イベント・ウェビナー）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト
2. 発表標題 抑圧を歴史化すること：日系移民知識人と1930～1945年国家主義ブラジルの記憶
3. 学会等名 2020年度 国際新世代ワークショップ「国際日本研究」コンソーシアム・法政大学国際日本学研究所・アルザス欧州日本学研究 共催事業所（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------